

【抄録】

第8回 日本国際小児保健学会 2024

シンポジウム

「就学前の子ども・子育て支援のための行政との連携」

「医療通訳を通して見える事～外国につながる子どもたちの受診から～」

三重大学医学部附属病院 総合サポートセンター

ワキモト 隆子

外国人患者にとって、医療機関に受診する際に医療通訳士が介入することは、とても大事なことである。当院では、2009年より医療通訳者を配置し、そうした外国人が安心して医療を受けられる為の取り組みを行っている。

小児の受診では、患児とその両親・家族が受診対象となり、コミュニケーションは、複雑になりやすい傾向にある。言葉の壁・文化・医療システム・医療文化の違いを理解したうえで、患者、家族の想いを医療通訳士は聞き取り、その情報を多職種と共有しながら治療を進めて行く事が求められる。その為には、医療者・医療通訳士・ソーシャルワーカー・小児トータルケアスタッフと連携をとりながら協働する必要がある。日本では小児に対しての助成制度も多い、その制度をスムーズに利用していくには、行政との連携も上手く取っていくことが必要である。また、よりの確な通訳をするためには、助成制度などを医療通訳士が知っておくことも必要である。

今回、未就学の脳性麻痺の患者とその家族の事例を通し、どのように多職種が係わっていったのかを紹介していく。この患児の初診時は、通訳士の介入はなく父親の通訳で受診を行っていたが、医療スタッフからの依頼で介入となった。自国では簡単に医療情報にアクセスできるが、日本ではできない患児・家族のジレンマなどを通し、多職種がどのように係わっているのかを紹介する。医療通訳士が同伴することの有用性と、両親の思いを検証し、今後の課題となっている事を評価し、検討し、医療通訳士の立場として見えてきたことを報告する。